

《研究ノート》

A・ロンカリアのヴィトゲンシュタインと
スラッファの関係に関する所説についての一試論

菱 山 泉

小論は、理論経済学の方法論的基礎にかんする予備的ノートである。それを、さしあたり、着目する三つの著作に依りて、三つの問題に区分することにする。その一つは、イタリアの若い経済学者、ロンカリア (Alessandro Roncaglia) が最近公刊した著作『スラッファと価格理論』 (*Sraffa e la teoria dei prezzi*, 1975) に提示したヴィトゲンシュタインとスラッファとの方法論的関連にかんする問題である。もう一つは、デヴィッド・ヒューム自身による自説の解説書、*An Abstract of A Treatise of Human Nature*, 1740 (この著作はアダム・スミスの伝記作家 J・レーなどによって、スミスのものとされていたが、それがヒュームの作品であることを校証したケインズが、スラッファとともに、序文を付して1938年に公刊した) にかんする問題。第三に、私は、上述の問題意識(理論経済学の方法論的基礎)にもとづき、イギリス経験論哲学の批判体系の一つという限定された観点から、ベルグソンの『物質と記憶』*Matière et Mémoire*, 1896 を検討してみたい。

読者は、この異様な配列の仕方に戸惑いを感じるかもしれないが、そのいずれもが理論的命題の経験的基礎という、われわれに共通の問題にかかわるものである。紙幅の関係上、小論では上の第一の問題だけに光をあてることにする。

ロンカリアの本は、私のために書かれたような錯覚を起させる著作である。特にその第6章がそうである。この章には、次のようなタイトルがつけられている。「限界主義的方法論の批判と克服としての《商品による商品の生産》」。『限界主義的方法論』とは新古典派の方法論と同義と考えてよく、著者は、サムエルソンなど現代の代表者をも念頭に置いている。『商品による商品の生産』(1960) (以下では『商品の生産』とよぶ)がスラッファの書物であることはいうまでもない。

章題に予示されているテーマは、少しも新奇なものではない。陳腐だと言ってさえよかるう。しかし私の興味をひくのは、『哲学探究』に代表される後期のヴィトゲンシュ

タインの方法がスラッファの『商品の生産』の方法と同類だとみなす彼の見解である。こうした論点に立ち入るまえに、公平を期するためにも、この章に託したロンカリアの検討主題を書きしるしておかねばならない。一般に、ロンカリアはスラッファの著作の核心を「生産価格の分析」より正確にいえば、「生産価格体系、ならびに分配変数（利潤率と賃金）の変化が生産価格に及ぼす影響の研究」（131ページ）に見る。こうした見地から、スラッファの（生産価格）分析がはめこまれる「方法論的な枠組み」（il quadro metodologico）を解明すること——これが、この章におけるロンカリアの主題である。この主題の解明は、以下のように類別された論点の順序どおりに行われる。

(1) スラッファの『商品の生産』のモデルに限界主義的な分析的概念（一般均衡、部分均衡、静学、動学のような）を適用することは不可能である。

(2) 価値と分配の限界主義的理論の方法論的基礎の検討。

(3) 限界主義の立つ前提を明らかにするために、『論理哲学論考』（『トラクタトゥス』）に代表される前期のヴィトゲンシュタインの理論を略述する。

(4) 『哲学探究』に結晶した後期のヴィトゲンシュタイン——それは前期の立場に対する自己批判の産物である——を援用しながら、限界主義的立場の出会う困難を吟味する。

(5) スラッファ理論がクーンのいわゆる「パラダイムの変革」をあらわすものとすれば、限界主義のような《主観的》タイプの立場と古典学派やスラッファのような《客観的》タイプの立場とは果して《平和共存》が可能かどうかを検討する。

(6) こうした可能性を退けた上で、スラッファの分析とマルクスの分析との関係を略述し、異なった方法論的立場（限界主義的立場と、スラッファならびにマルクスの立場の間）から導き出された若干の概念の相違を明らかにする。

さて、私は、すでに述べたように、後期のヴィトゲンシュタインの方法、いわゆる「言語ゲーム」（Sprachspiele, language-games）の方法がスラッファの『商品の生産』の方法に類似しているというロンカリアの所説を重要としているので、上の諸論点のうち、主に(3)(4)に注意を向けることにしたい。

『トラクタトゥス』¹⁾ がいわゆる〈ウィン学団〉の指導的メンバーにあたえた影響力

1) L. Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, 1922, 奥雅博訳「論理哲学論考」(「ウィトゲンシュタイン全集」第1巻所収), 1975, 小稿では、訳書のほか、原本について、*Proto-*

の強さを想起することによっても、この書物が今日の論理実証主義 (logical positivism) または論理経験主義 (logical empiricism) の形成に古典的役割を果たしたことは、容易に想像できる。また一方、論理実証主義こそは、「一般均衡論」のスケルトンを提示したワルラスの系譜を引く数理的な新古典派経済学にその方法論的立場をあたえたと想定してよいように思われる²⁾。

ロンカリアも、ヴィトゲンシュタインの『トラクタトゥス』の方法と「限界主義的方法論」との類同を強く意識しながら、言語もしくは命題の「写像の理論」とよばれるヴィトゲンシュタインの所説を要約して行く。「『トラクタトゥス』が支持するのは、一方、世界とそれ自身の構成要素(《事実》)、他方、それについてわれわれがつくる世界の映像(その構成要素は《命題》のなかに表現される《思想》である)との間の対応の存在である。」(137ページ) 一方において、分解不能の原子的事実、これから構成される個々の事実、そして、こうした個々の事実から構成される「世界」があり、他方において、分析不能の要素命題、これから構成される個々の命題、そして、こうした個々の命題から合成される「言語」がある。すなわち、一方、「世界」の側にも、他方、その写像としての「言語」の側にも、それ以上に分解できない、アトム＝原子があり、それらの原子的事実と要素命題(すなわち原子的命題)との間には、1対1の対応関係がある。ロンカリアはいう。「こうした基礎の上に、命題の、公理的かつ論理的な構成の可能性が支持されてきた。そうした命題のそれぞれは一つの《事実》を描写し、それらの命題の複合体が世界を描写する。あるいはむしろ、世界の全体ではないとしても、世界のうちで合理的な形式で描写できるもののすべてを描写するのである。その残りのものについては、すなわち、合理的な描写を提供できないものについては、《沈黙しななければならない》。」(138ページ) この冷ややかさは何処からくるのであろうか。それは近代合理主義の極所であらうか。合理的な言語——演繹的・数学的な命題とってよいかもしれない——に写しとれない

¹⁾ *tractatus*, ed. by B. F. McGuinness, T. Nyberg. G. H. von Wright, 1971 を参照した。引用にあたっては、『トラクタトゥス』または『論考』とよび、ページではなく、文の冒頭に付されたナンバーを書き記すことにする。

²⁾ 安井孫磨教授はいう。「経済学の内部で学派がなくなり、数学がゆるぎのない市民権を獲得し、主としてワルラスの名に結びつく均衡理論が近代経済学のパラダイム (paradigm) として確立して以来(時代的にいえばほぼ1930年代以来)、この経済学が意識的あるいは無意識的に立脚している立場は、論理実証主義あるいはその系譜をひく科学哲学といえるであろう。」(近代経済学と論理実証主義、「理論経済学」第22巻第1号、1ページ)。

事実は、これを無視ないし捨象しなければならぬ。このような冷徹な合理主義、徹底したアトミズムは、『プリンキピア・マテマティカ』の著者の一人、バートランド・ラッセルの胸を打った。

ロンカリアは、しかし(世界と言語の両側における)、徹底したヴィトゲンシュタインのアトミズムのなかに、ユニュークで《一般的な》理論の成立の可能性を読みとり、それが、新古典派経済学の「一般理論」の方法論的基礎に重なり合うものと考えている。かくて、ロンカリアは次のように結んでいる。「価値と分配の限界理論は、(暗黙であるか明示的であるか、無意識のうちに意識的であるかを問わず)初期のヴィトゲンシュタインの立場に類似した哲学的立場の基礎の上に、打ちたてられ、是認されえたのである。すなわち、リアリティと理論とのアトミスティックな基礎(《経済主体》と《財》)、世界の事実と言語の(すなわち、リアリティの合理的な描写である限り、理論の)要素との間の対応関係、世界のうちで描写可能なものすべてに³⁾ ついての、一般的法則による、完全な記述(新古典派にあれば重視された《一般理論》)の要請が、それである。」(138ページ)

ヴィトゲンシュタインが確信をもって公刊した『トラクタトゥス』——スラッファと同様、徹底した完全主義者であったヴィトゲンシュタインが書物の形で生前に公表した唯一の著作——の立場は、結局、彼自身によって放棄されることになった。この転向は、バートランド・ラッセルとの絶縁をもたらしたことは、いうまでもない。前期の思想に対するヴィトゲンシュタインの自己批判の産物が、遺著『哲学探究』⁴⁾のなかにとり込まれていると見てよい。

「ザラザラした大地へ戻れ！」(Back to the rough ground!) という句が現われる『哲学探究』の一文⁵⁾に、透明で純粹、かつ合理的な言語の一般理論の構成の可能性を確信

- 3) ヴィトゲンシュタインにとっては、描写可能なものすべて、いいかえれば、言語で表明できるものすべてが「世界」であって、その外側にも世界があるのではないように思われる。外側にあるものは、「神秘的なもの」だ。ロンカリアの読み方は、不正確である。ヴィトゲンシュタインはいう。「世界は完全に一般化された命題によって、完全に記述できる……。」(『論考』5.526) また、次のようにもいう。「私の言語の限界が私の世界の限界でもある。」(同上, 5.6)。
- 4) L. Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen*, 1953, 藤本隆志訳「哲学探究」(『ヴィトゲンシュタイン全集』第8巻)1976。引用にあたっては、G. E. M. Anscombe の英訳 *Philosophical Investigations*, 1968 をも参照した。引照ページについては、英訳・邦訳を併記する。
- 5) 清水幾太郎氏は、その啓発的な著作『倫理学ノート』(昭47)において、「ザラザラした大地」というタイトルを一つの章に冠しているけれども、氏は、この一文、いなこの一句に、この著作と、ヴィトゲンシュタインとの「最後の言葉」を見ている。私も、この一文に、『哲学探究』に託したヴィトゲンシュタインの問題意識を見ることができると思う。

した『トラクタトゥス』のヴィトゲンシュタインの、その確信の崩れ落ちる音を、私は、ききとることができそうに思う。「現実の言語を精密に考察すればするほど、この言語とわれわれの要請との間の衝突が劇しくなる。(論理の透明な純粋さといったものは、わたくしにとっては〔探究の結果〕生じてきたのではなく、一つの要請だったのである。) この衝突は耐えがたくなり、この要請はいまにも空虚なものになろうとしている。——われわれはなめらかな氷の上に迷いこんでいて、そこでは摩擦がなく、したがって諸条件があるいみでは理想的なのだけれども、しかし、われわれはまさにそのために先へ進むことができない。われわれは先へ進みたいのだ。だから摩擦が必要なのだ。ザラザラした大地へ戻れ！」(p. 46, 98ページ, 107) これはひとごとではない。リアリティについて、透明で純粋、かつ一般的な合理的図式(一般理論)の構成の可能性を堅く信じている、経済学者の一集団にも、この一文は、つきつけられていると見なければならぬからである。

前期のヴィトゲンシュタインから、後期のヴィトゲンシュタインへの、すなわち『トラクタトゥス』から『哲学探究』への思想のラディカルな転換に、われわれに馴染み深いケンブリッジの二人の学者、F・ラムゼイとP. スラッファ、とりわけ、後者が、深くかつ決定的にかかわっていることは、(一般に、とはいえないが)よく知られている。ロンカリアもこの事実に着しているけれども、私は、わたくしなりに、その典拠となる資料を以下に集録しておきたい。

(1) 前掲のヴィトゲンシュタインの遺著『哲学探究』の、死後に世にまみえることを期待した序の中で、こう彼は述べている。「……16年前ふたたび哲学に従事するようになって以来、わたくしは、自分が最初の著書『トラクタトゥス』、[引用者]の中で書き記しておいたことのうちに、重大な誤まりのあることを認めなくてはならなくなった。そうした誤謬を見ぬくの——わたくし自身ほとんど評価できないほど——役立ったのは、フランク・ラムゼイがわたくしの考えに対して下した批判であった。——かれの生涯の最後の2年間、わたくしは、かれと数えきれないくらい話し合い、自分の考えについて議論したのである。——かれの——常に強力で的確な——批判にもまして、わたくしは、この大学の教師であるP・スラッファ氏が、長年の間絶え間なくわたくしの思想について行なってくれた批判のおかげを蒙っている。こうした激励のおかげで、この手稿に現われる思想のうち最も実りゆたかな部分が生まれたのである。」(p. viii, 11ページ)

(2) フォンランドの哲学者フォン・ウリクトの手になる「ヴィトゲンシュタイン小伝」中の次の一文。「ヴィトゲンシュタインの新しい思想が生まれるに際してきわめて重要だったのは、二人の友人がかれの初期の思想に対して下した批判であった。その一人はラムゼイであって、かれが1920年に夭折したことは現代思想界の痛恨事であった。もう一人は、ヴィトゲンシュタインが戻る少し前にケンブリッジへ来ていたイタリアの経済学者、ピエロ・スラッファである。ヴィトゲンシュタインが自分の初期の見解を放棄し、新しい路線へ進むことを余儀なくされたのは、とりわけスラッファの鋭利で強烈な批判があったからである。スラッファと議論すると、枝をぜんぶ切り落された樹になったような感じがする、とヴィトゲンシュタインは述べている。この樹がもう一度緑の枝をつけえたのは、それ自身に生命力があったからである。後期のヴィトゲンシュタインは、前期のかれがフレーゲやラッセルから受けたような靈感を、外部から受けなかったのである。」⁶⁾

(3) もう一つは、いわばヴィトゲンシュタインのまな弟子の、アメリカの哲学者マルコムが草した「ヴィトゲンシュタインの思い出」にあるエピソード。「もう一つの事件は、こうした考えかた〔命題が実在の写像だという考え方、引用者〕の破壊を促進したことがらに関するものである。ヴィトゲンシュタインと、ケンブリッジ大学の経済学講師であったP・スラッファは、一緒に『論考』の思想について沢山の議論をとりかわしていた。ある日（二人が列車に乗っているときだったとわたくしは思う）、ヴィトゲンシュタインが、命題とそれが表現していることがらとは同じ「論理形式」、同じ「論理的多様性」を共有していなくてはならぬと言い張ると、スラッファは、片方の手の指先でアゴを外側へこする動作、つまりナポリの人にはよく知られていて、嫌悪感ないし軽蔑感といった気持を意味するような身振りをしてみせ、それから「これの論理形式って何なのだろう」と尋ねた、というのである。スラッファの挙げた例は、命題とそれが記述していることがらと同じ「形式」をもたねばならぬと固執することにはある種の不合理がある、という気持をヴィトゲンシュタインに植えつけた。これが、命題は文字通りその記述する実在の「写像」でなくてはならない、というかれの固定観念をうち破ったので

6) G. H. von Wright, Biographical Sketch in *L. Wittgenstein, A Memoir*, by N. Malcolm, 1958, pp. 15-16, 藤本隆志訳, ノーマン・マルコム他「回想のヴィトゲンシュタイン」1974, 24-25ページ。

ある。』⁷⁾

私は、この最後のエピソードに、どの程度のウェイトを置くべきかを断定することができないけれども、ロンカリアは、それにかかなりの重みを置いているように思われる。「身振り」(gesture)は、厳密に言えば、命題とはいえないだろうが、それでも、『哲学探究』の立場からは、一種の「原始的言語」といえそうに思われる。この身振りが嫌悪や軽蔑を意味するのは、ナポリの人々の間でしか、すなわち、一定の社会的文脈においてしか、理解できないといえるであろう。一般に、言語や命題の意味は、それが慣用されている状況や文脈を離れては、把握できないということになるのかもしれない。こうしたことを念頭におきながら、次のロンカリアの一文を読むことにしよう。「こうした身振りは、それが使用される文脈においてのみ、明確な意味を見出すことができる。したがってそれは、命題のそれぞれが慣用されてきた文脈から独立に、合理的言語の公理的な秩序 (ordine assiomatico del linguaggio razionale) のなかに、厳密な位置を見出すはずだというヴィトゲンシュタインの〔前期の、引用者〕思想と相容れることができなかった。』(139ページ)

私はここで、突然、純粋経済学の可能性を一般均衡理論のなかに見る方法に投げられてきた批判を想起する。そうした批判は、要するに、社会的文脈から独立に、経済的リアリティの濁りを分析によって捨象し、それをば透明で純粋な、そしてユニークでもある演繹的な数学的理論モデルに還元する方法に、向けられていたのではないか。スラッファが上の事例で打ち破ろうとした、合理的言語の一般理論と、それは、同系のもの、方法論的基礎を共通にするもの、ではなかったか。

それはともかく、私は、ロンカリアとともに、後期のヴィトゲンシュタインの思想——『哲学探究』——の扉を開くことにしよう。『哲学探究』で、ヴィトゲンシュタインが彫琢しようとしたものは何か。「新しい言語の理論、言語とそれが描写する世界との関係についての新しい理論」(139-40ページ)であるとロンカリアはいう。世界を写しとる唯一の純粋な言語、事実を one to one correspondence の下でユニークに描写する命題などありはしない。文脈——生活の文脈、社会の文脈といった方がよいかも

7) *Ibid.*, p. 69, 前掲書, 114ページ。

ない——から独立に、言語や命題の固定した唯一の用法すなわち意味など存在するはずはない。敬語は文脈によっては、卑語になることもある。具体的で濁りのあるリアリティに目をひらくならば、言語や命題の使い方には無数の異なった種類がある。ヴィトゲンシュタインはいう。「こうした多様さは、固定したものでも一遍に与えられるものでもなく、新しい言語、新しい言語ゲームが、いわば発生し、他のものがすたれ、忘れられていく、と言うことができよう。」(p. 11, 32ページ, 23) この一文に、新しい言語理論の中心的な考想である「言語ゲーム」(language-games)ということばが現われる。ヴィトゲンシュタインはいう。「〈言語ゲーム〉ということばは、ここでは、言語を話すということが、一つの活動ないし生活様式の一部(part of an activity, or of a form of life)であることを、はっきりさせるのでなくてはならない。」(p. 11, 32ページ)

「言語ゲーム」という観点からは、言語や命題を活動、生活、社会の文脈において見なければならぬから、同じ語、同じ命題であっても、それは、文脈に応じて、様々な用法すなわち意味をもつ。したがって命題は、リアリティの、分解不能のアトムの事実やそれらから合成された個々の事実——生活や社会の文脈から独立した、すなわち人間生活の不確定性を捨象した確定的で固定した事実——にユニークな仕方に対応すると見るべきではない。『哲学探究』に収めたヴィトゲンシュタインの観点をおいつめて行くと、こういうことにならざるをえないように思われる。それを一言でいえば、命題と事実との1対1の対応関係は存在しないということである。

言語すなわち言語ゲームの多様性を認めると、言語にかんする単一の一般理論の可能性はますます覚束ないものになる。ヴィトゲンシュタインは、「言語ゲーム」として言語をとらえる自らの方法に対する抗議を先取りして、そうした抗議を次のように表わしている。「おまえは安易なやりかたをしている！すべての可能な言語ゲームについて語ってはいるが、それなら言語ゲームにとって本質的なものは何か、したがって言語の本質は何なのか、おまえはどこにも言っていない。これらすべての出来事に共通なものは何なのか、そして、それらを言語、あるいは言語の一部にするものは何なのか。」(p. 31, 68ページ, 65)(傍点、引用者) 私は、抗議を先取りして、といった。が、そういう表現は正しくない。正しくは、この抗議に表明されたものは以前の彼自身の立場だといわねばならない。それはともかく、こうした抗議に対するヴィトゲンシュタインの答えは次のとおりである。「われわれが言語と呼ぶものすべてに共通な何かを述べる代りに、わた

くしは、これらの現実のすべてに対して同じことばを適用しているからといって、それらに共通なものなど何一つなく、——これらの現象は互いに多くの異なったしかたで類似しているのだ、と言っているのである。そして、この類似性ないしこれらの類似性のために、われわれはこれらの現象すべてを「言語」と呼ぶ。(同上、65) 盤ゲーム、カード・ゲーム、球戯、競技、等々を考えずに見よと、ヴィトゲンシュタインはいう。「それらを注視すれば、すべてに共通なものは見ないだろうが、それらの類似性、連関性を見、しかもそれらの全系列を見るだろうからである。」(p.31, 69ページ, 66)要するに、こうした観察の結果、「われわれは、互いに重なり合ったり、交差し合ったりしている複雑な類似性の綱目を見、大まかな類似性やこまかな類似性を見ているのである。」(同上、66) ヴィトゲンシュタインがこうした類似性を「家族的類似性」(family resemblances) ということばで呼んだことを、忘れないでおこう⁸⁾。

このように書き進んでくるうちに、私には、経済学にかんする連想が浮かびあがる。言語はゲームだとヴィトゲンシュタインはいうけれども、経済もゲームとよぶことが出来る、いやむしろ、ゲームとよぶにふさわしいものではないか。とにかくゲームとしてとらえる見方は、経済学における方がある意味では一そう定着した市民権を得ていると言えるのではないか。生産・分配・消費などとよぶかわりに、生産のゲーム、分配のゲーム、消費のゲームなどと言っても不自然ではないのではないか。そして、ヴィトゲンシュタインの注意を守ることにして、それらのゲームを考えるのではなくて見てみるならば、これらのゲームに同じ概念、同じ用語を適用しているからといって、それらのすべてに共通なものはなく、相互に重なり、交差し合っている複雑な類似性——「家族的類似性」——を見るのではなかろうか。しかし、見るのではなく考えるラインに沿って行くと、あの思考の掟の、すなわち論理の要請の、強圧的な力に抗することが出来なく

8) リアリティの多様な連関を「家族的類似性」という半透明の概念によってとらえようとするヴィトゲンシュタインの考想は、次のような『論考』の命題を放棄することを意味する。「一般的命題形式が命題の本質である。」(5.471)、「命題の本質を陳述するとは、全ての記述の本質を、従って世界の本質を陳述することである。」(5.4711)。「一般的命題形式」を断念することになると、「世界は完全に一般化された命題によって、完全に記述できる」(Man kann die Welt vollständig durch vollkommen verallgemeinerte Sätze beschreiben) ということは、寛東ない。そうすると、「論理は世界を満たす。世界の限界は論理の限界である。」(5.61)ということも成立できないであろう。つまり、世界に対応する透明で確実な一般的論理の可能性の基盤を失ってしまうのである。

なって、それらの現象のすべてにかんする単一の一般理論を考想する方へと導かれて行かざるをえなくなるのではないか。そうした論理とは、前期のヴィトゲンシュタインの思想に比類のない仕方⁹⁾で結晶したものであるけれども、彼は、『哲学探究』のなかで、それをば克服すべきもの、拒否すべきものとして、しかし美しいことばで、次のように書き記している。「思考には後光がさしている。——その本質、〔すなわち〕論理は一つの秩序、しかも世界のア・プリオリな秩序、ないしは世界と思考に共通でなくてはならないような可能性の秩序、を描き出す。しかし、この秩序は最高に単純でなくてはならないように見える。それらはすべての経験に先立っており、全経験を貫ぬき通っているのでなくてはならない。それ自体には、いかなる経験の濁りも不確実さも付着してはならぬ。——それは、むしろ、もっとも純粋な結晶体でなくてはならない。しかるに、この結晶体は一種の抽象としてではなく、何か具体的なもの、すなわちもっとも具体的で、いわばもっともかたいもの、として現われる。」(p.44, 93-94ページ, 97)

これほど格調の高いものとはいえないが、これと同系の論理の要請とおぼしきものがサムエルソンの一文にもあらわれている。「いろいろな理論の中核をなしているものの中に類似点が認められるという事実は、そこに個々の理論の底を貫いて流れ、しかもそれぞれの中核を互いに結びつけている一般理論が存在することを示唆している。抽象による一般化というこの基本原理は、著名なアメリカの数学者ムーア・E・H・Mooreにより30年以上も前に明快に論述されている。本書の目的は、この基本原理が理論経済学や応用経済学にどのような示唆を与えるかを考察することにある。」¹⁰⁾

あらゆる理論の底を貫いて流れ、しかもそれぞれの中核を互いに結びつけるような、ハードで透明で純粋な、単一の一般理論は、一つの要請であるにしても、リアリティの探究の結果生じたものではなく、またリアリティと論理形式を同じくするものでもなく、リアリティの説明図式としても適切ではないというのが、後期のヴィトゲンシュタインの到達した立場であるように思われる。

ここで私は、ロンカリアの所説に立ちかえることにしたい。彼は、クァイントンの論文¹⁰⁾から次の一文を引いて、「言語ゲーム」という観点の意味するものを結んでいる。

9) 佐藤隆三訳, P. A. サミュエルソン「経済分析の基礎」1967年, 3ページ。
10) A. M. Quinton, Excerpt from "Contemporary British Philosophy", in G. Pitcher (ed.), *Wittgenstein, The Philosophical Investigations*, 1966, pp. 1-21.

「命題を本質的に分解不能の要素へ解体するユニークな分析は存在しない。どのような種類の分析が有用でリアルな解明を与えるかは、事情の如何、検討される命題がかかわる問題の如何に、依存する。」(p.13)

この、比較的陳腐で、実用主義的にさえみえる所見を、あえて解説すれば、次のようになるかもしれない。命題や言語が事実や世界の写像であるという考え方を放棄すると、言語を命題に、命題を要素的(アトムの)命題に解体するユニークな分析も、また一方、それと1対1の対応関係に立って、世界を事実に、事実をアトムの事実に解体する方法も、いずれもその存立の基盤を失なう。要するに、言語とリアリティの双方にわたるアトミスティックな構成をしりぞけると、リアリティとその「論理形式」を同じくするユニークな合理的・理想的言語の一般理論を構成することができない。ところが、一方「言語ゲーム」の観点に立つと、命題や言語の用法(慣用)は多様であり、それぞれの用法(すなわち意味)は、それらに関する「文脈」(生活の文脈、社会の文脈)において把握しなければならない。命題に関係する「事情」あるいは「問題」というのは、「文脈」に相当するとみてよい。こうした見地からすれば、有効な理論は、リアリティの特定の「文脈」に関して、あるいはむしろ、そうした「文脈」につつまこまれることによって、構成されるのであって、こうした「文脈」から独立に、あるいはむしろ、超越したところで、公理的、演繹的な一般理論として構成されるのではない。

さて、ロンカリアによると、スラッファの分析は、後期のヴィトゲンシュタイン、すなわち『哲学探究』の方法論にもとづくという。「こうした結論は、『商品の生産』の分析が展開する仕方から示唆される」という。このあたりが注目すべき箇所なので、彼の所説を正確に書き記しておこう。「問題(相対価格に対する所得分配の直接の影響)が与えられると、その解に必要なすべての要素が考えられ、しかも、そうした問題を決定的に解決するとはいえ、経済研究の全域をつくしているという要求を少しももたない、一つの理論が構成される。むしろ反対に、それに固有の境界を限定する仕方それ自体によって、自らの領域にとって外生的な一連の問題、すなわち、分配、活動水準、テクノロジーのごとき問題の存在を浮き彫りにするのである。」(141ページ)この一文では有効な分析が命題のかかわる問題に依存するという、先のクワイントンの考え方が効いている。私が数えんする解釈では、一個の言語の意味がその言語が使われる生きた「文脈」にお

いて、解明されるように、一個の命題や理論は、そのかかわるリアリティの「文脈」においてのみ、すなわち、それがかかわる「状況」や「問題」——つまりところ人間生活や活動の特定の局面＝領域——にかんしてのみ、意義をもつというべきである。

生産価格の決定機構の解明という問題に自らの分析を限定することによって、かえって他の一連の（ここでは取り扱われない）問題を浮き彫りにする、たとえば分配の問題をば自己の理論に外生的なものとして、浮き彫りにするという場合、研究者のいうように、スラッファは、価格と分配とを——新古典派のように——同系の論理でつかもうとしていないというのが恐らく正しいであろう¹¹⁾。価格決定のゲームと分配決定のゲームとは、ヴィトゲンシュタインのことばを引けば、相互の間に「家族的類似性」を見ることができるとしても、それらの理論（価格理論、分配の理論）の底を貫いて流れ、しかもそれぞれの中核を結びつけるような、単一の、透明で純粋な論理を考へることは出来ないというのがスラッファの立場であろう。ここまでは、ロンカリアの所説をふくらませることによって、後期のヴィトゲンシュタインの思想を透してスラッファの方法論の特色の一つを読みとることが出来そうにみえる。が、ここから先、私は、ロンカリアを離れて彼の注意を免れている若干の論点を指摘してみたい。

スラッファにとって、問題（生産価格の決定機構、分配の変化の生産価格に及ぼす効果の解明）の設定は、決して恣意的なものとするべきではない。こうした問題が経済学にとって基本的だという認識はともかく、半透明で濁りのある、そして不確実な広大な経済的リアリティの大海のなかで、透明で確実な、そして固い分析的論理の妥当する限界を求めて、生産価格体系の解明に、自らの問題をきびしく限定したというべきではあるまいか。換言すれば、スラッファにとっての課題は、ある意味で、確実で透明な分析的論理がぎりぎりのところ、どの範囲まで妥当するか、を見きわめることにあったようにみえる。したがって、分配のゲームをば生産価格決定ゲームにとって、外生的なものとして、分配理論の構成にまで、その触手を延ばさなかったのは、全体として、分配の問題が透明で確実な分析論理によっては捕捉できないものをもつという、スラッファの決断によるものではなかったか。私は、ここで、ケンブリッジ滞在中にスラッファと交わした議論で、彼がたびたび発した「それは確実な基礎に立っていない」という言葉を、想起す

11) Cf., M. Dobb, *Theories of Value and Distribution since Adam Smith*, 1973, pp. 34-35, 261.

る。いずれにせよ、スラッファの観点からすると、価格の理論と分配の理論は、新古典派経済学におけるように、本質的に同系の論理で構成されるべきものでないばかりか、論理の位相を異にするものといわねばならない。

『哲学探究』のなかで、ヴィトゲンシュタインは、次のようにいう。

〈ゲーム〉という概念は輪郭のぼやけた概念だと言うことができる。——「だが、ぼやけた概念など、そもそも概念なのか。」——ピンボケの写眞はそもそも人間の映像なのか。そのうえ、ピンボケの映像をはっきりした映像でおきかえることが、いつも都合のいいことなのか。ピンボケのものこそ、まさにしばしばわれわれの必要とするものではないのか。(p.34, 73ページ, 71, 傍点, 引用者)

半透明で濁りのある、しかも不確実な経済的リアリティの大海を、透明で純粋な、しかも確実な数学のことばでおきかえることがいつも都合がよいとは私も思わない。それはややもすると、リアリティのひどい犠牲をおかしながら抗しがたく見える論理の要請に服することを意味するからである。「ピンボケのもの」——つまりは、半透明で濁りのある、しかも不確実なものこそ、逆説にきこえるかもしれないが、しばしば経験科学の求めるところだと私は思う。

しかし、スラッファは、厳しすぎるほど限定した自らの問題領域の内部では、決して「ピンボケのもの」を求めたわけではない。そこで妥当する分析論理については、厳しすぎるほどの厳密性と確実性を要求しているときえ言えそうに思われる。スラッファが、自らの主題である「分配の変化にともなう価格運動の研究」(23「不変の価値尺度」)にとって、「それ以外の生産物の価格運動を孤立化させて、あたかも真空のなかにあるかのように観察することを可能ならしめる」(同上)標準商品=「不変の価値尺度」の構成を、必須の条件と考えた点に、そのことが最も鮮明にあらわれている。こうした点をさらに確認しておくために、スラッファが学会で(「資本その他の経済的集計量の測定」と題するヒックスの報告について)発言した要旨を次に抜萃しておきたい。

スラッファ氏は、二つの型の測定の区別を強調すべきだと考えた。その一つは、統計学者が主に関心をもつもの。いま一つは、理論上の測定である。統計学者の尺度は、単に近似的であり、指数問題を解決する仕事にふさわしい分野を与えるにす

ぎない。〔これに反して〕理論的尺度は絶対的な厳密さ (absolute precision) を要求する。こうした理論的尺度に少しでも欠陥があると、それはたんに、理論的基礎の全体をひっくりかえすばかりか、それを破砕してしまう。……そこで、資本の定義を、これとは全く別の統計的測定の必要から切り離しておく必要がある。J・B・クラーク、ベーム・パヴェルクその他の人たちの仕事は、現実の測定の手引きとしてではなく、まさに、かれらの理論によって要請されたものとして、資本の純粋な定義を生み出そうと意図されたものである。もしわれわれが〔そこに〕矛盾を発見するなら、それによって、当該理論の欠陥が示されるのであって、資本の尺度を厳密に定義することは不可能になる。われわれが注意を集中すべきは、〔統計的な〕測定の問題にというよりむしろ、こうしたこと——資本理論の主たる欠陥——についてである¹²⁾。

けれども、スラッファが上述のように限定された問題の解明に求めた、透明で確実な論理は、果して、前期のヴィトゲンシュタインのもの、すなわち『トラクタトゥス』の論理と全く同系のものであろうか。『トラクタトゥス』は、すでに見たように、言語の「写像理論」に伴われる、徹底した要素還元主義、すなわちアトミズムの立場に立つ。実在すなわち世界に対し、1対1の対応関係を示すものとして、それらを合理的な形式で写し取る言語(すなわち命題の複合体)は、究極の、分解不能のアトムの命題に還元されるもの、と見る。私の目には、こういう意味でのアトムは、スラッファ体系には存在していないように見える。少なくとも、あらゆる文脈から独立に、合理的で恒常的な性向(極大化性向)をもつ経済人という、新古典派理論の基底にあるようなアトムの命題は、スラッファ体系の舞台に明示的に登場しない。この点は、新古典派理論との顕著な相違を与えるものとして、研究者の目にまず最初に、うつし出される。かくて、E・J・ネルはいう。

〔ワルラス型の価値論と〕対照的に、リカード型の価値論〔このことばでネルは典型としてのスラッファ理論を考えている、引用者〕においては、企業も消費者も指摘されない。ただ産業だけが示される、というよりはむしろ、たんに生産技術が現われ

12) F. A. Lutz, D. C. Hague (ed.), *The Theory of Capital*, Proceedings of a Conference held by the International Economic Association, 1961, pp. 305-306.

るにすぎない。そして各産業は、それぞれが使用する技術によって定義される¹³⁾。

私は、ここで行動主義的な構成に対比して、構造主義的な構成という概念を使うことにしたい。一般に、あらゆる経済現象をば、一定の制約条件の下での、経済主体の最適化行動に還元する、新古典派の標準的な接近方法を、私は、行動主義的構成の一種と考えている¹⁴⁾。スラッファの方法は、これとは違う。スラッファの主眼は、経済体系が全体として、自己を補填する状態——労働を含めて生産手段として投入されたものが生産物として丁度、回収される状態——を最低限として、いいかえれば、体系の「生存可能性」(viability)を最低の条件として、体系全体の所与の生産方法(テクノロジー)の下で、換言すれば、諸産業の技術的相互依存関係の前提の下で、経済が円滑に再生産を続けて行くことを保障する生産価格の組み合わせを探究することにある。こうした条件の下で、分配の変化にともなる生産価格の運動を定量的に確定する理論を構成するのが、彼の真のネライである。

新古典派理論には、均衡価格体系が個々人、または個々人の集合にとって、かれらの満足を極大化するという点で、どういう関係にあるかを明示的または暗黙のうちに意味することによって、いわゆる *welfare implication* がある。しかし、スラッファ体系には、こうした含意がない。むしろ、スラッファ体系で決定された生産価格の組み合わせは、経済体系全体の「生存可能性」、一般には、「剰余」の可能性に緊密な関係がある

13) E. J. Nell, *Theories of Growth and Theories of Value*, in G. C. Harcourt and N. F. Laing (ed.), *Capital and Growth*, 1971, p. 198.

14) 同時的な方程式体系からなる均衡理論のモデルも、ある意味で「構造」を表わしている。しかし、そうした構造の要素である方程式のすべてではないにしても、(定義式などを除く)主要なもの、行動方程式であり、それぞれが微視的な経済主体[消費者、生産者(企業)などの]の合理的かつ整合的行動の仮定に還元されるものと思われる。スラッファ・モデルを構成する方程式体系を、上記と同様の手続きで、微視的な主体的行動の均衡(たとえば「企業の均衡」)に還元することは、かりに不可能でないにしても、無意味であろう。私の見るところでは、この体系で行動主義的仮定にみえる「均一の利潤率」さえも、事実にかんする想定ではなく、論理上の単純化の想定と解するのが妥当であろう。(したがって、それは複数の利潤率、複数の自由度を高次の接近として論理的に含んでいる。) もちろん、かような論理的な想定の実事に対する適用は、語や言語の慣用と同様に、「文脈」に応じて、多様な解釈が可能であろう。逆説的な言いまわしだが、スラッファ・モデルは徹底した構造主義的体系であるから、どのような(非定型的でランダムな)主体の行動をも包含しうると言えるかもしれない。これに反して、行動主義的体系は、その基石の役割りを演じる定型的で正常的、かつ不変的な主体の行動仮説がリアリティから乖離するにつれて、リアリティに対する説明的価値を薄弱にするという弱点をもっているように思われる。

という意味で、それはいわば *viability implication* をもつといえるかもしれない。とにかく、私には、スラッファ体系を通例の行動主義的構成の眼鏡を通して見るのは適切ではなく、それとは別の、かりに構造主義的構成と呼ぶ手法で把握した方がよいように思われる。いうまでもなく、こうしたスラッファの経済社会の見方は、彼の古典派経済学研究の過程で培養されたと考える方が自然であり、前期のヴィトゲンシュタインの思想(『トラクタトゥス』)とは、異なった想源をもつといえるであろう¹⁵⁾。(1976, 10, 8)

- 15) 前期のヴィトゲンシュタインの思想、すなわち『トラクタトゥス』の想源はフレーゲとラッセルだということは、研究者のしばしば引証するところである。しかし、『トラクタトゥス』は、ある意味でデカルト主義の行きついた極点だと解することもできよう。『トラクタトゥス』の論理の立て方は、新古典派的方法のような行動主義的なものには属さない、というより、一体、主体の働きが存在することさえ疑わしい。言語を扱っていると言うのに、「思考し表象する主体は存在しない」(5.631)という。果して「行動する主体」は存在するのだろうか。また、こうもいう。「主体は世界には属さない。それは世界の限界である。」(5.632)。私は、『トラクタトゥス』を読みながら、無数のパイプラインで連結された、幾何学的で、クリアな、そして、合理的な石油コンビナートを連想する。この壮大な構成物の空間の、少なくとも、視界には、人間は不在である。「ビンボケのもの」などの空間には存在する余地はない。また、「明確に境界のきまっていない領域」などは、この空間には現われない。かくて、ある意味で、『トラクタトゥス』の論理空間は、徹底した構造主義的構成を表わすといえるかもしれない。しかも、その構成は異時的でなく、同時的である。

ヴィトゲンシュタインは、「世界は私の意志から独立である」(Die Welt ist unabhängig von meinem Willen) (6.373) という。私は、ここで、“Le monde va en soi-même” (世界はそれ自ら動く) というフィジオクラートの一句を想起する。ともあれヴィトゲンシュタインは、人間と世界との関係について、決定的な言葉を書き記している。「仮に我々の望む、全てのことが生じたとしても、このことはやはり、いわば運命の恩寵にすぎないであろう。何故なら意志と世界との間には、このことを保証するような論理的な連関は存在しないからである。そして物理的な連関が想定されるとしても、この連関自身を欲することはやはり不可能だからである。」(6.374)。ここまで来ると、私は、ヴィトゲンシュタインの論理空間、フランソワ・ケネーの『経済表』の世界、スラッファ体系の論理が重なり合い、交差し合いながら一種の「家族的類似性」を表わすものとして、映じてくる。しかも、そうした映像の背景に、折し難い運命に操られた主体の働きの悲劇という古代ギリシア以来の文芸のテーマ——マキアヴェリ言葉でいえば Fortuna (運命) と Virtù (主体の働き) とのかみみ合いというテーマ——が浮かび上ってくるように思われるが、それは私の思いすごしであろうか？ いずれにせよ、私はロンカリアとは随分遠く離れてしまったように思う。